転換の魔剣と抑止の聖剣

狛井菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転換の魔剣と抑止の聖剣

【Ｎコード】
Ｎ９０９９Ｙ

【作者名】
狛井菜緒

【あらすじ】
父親の借金を、冒険者となって各地で働き、その金で借金を返済しきった没落貴族の娘ユーリット・ファベルは、久しぶりに家族から大至急帰って来いと呼び戻される。
家に帰った、彼女を待ち受けていたのは避けようがない縁談話であった。しかも嫁ぎ先は隣国で…嫁ぐ相手のアルファンはユーリットにとっては天敵と呼べる厄介な力を持った男だった。

只でさえ苦労している女の子がさらに頑張る話です。

序幕（前書き）

誤字脱字があったら教えてください

・世界観・

神々の祝福が根強く残る世界で、危険な魔物などが普通にいるため常に戦力が必要とされてます。

先祖代々受け継がれてきた血筋にまで神々の祝福が宿っており、祝福を持たないと言う人間はいません。

いるとしたら異世界人です

序幕

ママレカ公国の南西の港町・エレナダの冒険者ギルド《海の秘宝》には、今日もたくさんの屈強な冒険者達が出入りするなか、掲示物の前に一際異彩を放つ少女が立っていた。

年の頃は１６か１７ぐらだろうか。白い髪を藍色の紐リボンで結い上げ、華奢で小さな身体を騎士の洋装と星銀製の甲冑で包んみ、腰には容姿とは真逆の黒い剣を帯びている。

清んだ菫色の瞳と雪のように白い髪と肌が一際美しく魅せており、さながら貴族の美少年に見える。が、身体の凹凸でかろうじて少女だとわかるぐらい、色気は乏しい。

その気品からして貴族の息女である事は間違いなく、なぜこんな荒くればかりいるギルドにいるのか疑問に持つ者も多いだろう。彼女の名前はユーリット・ファベル。

ここ《海の秘宝》屈指の高位の冒険者で、現在受けていた依頼を終え、次の依頼を受けるため掲示板に貼られた掲示物を見上げていたが、一枚の依頼書の内容を読んでユーリットは眉間に皺を寄せた。

《魔法騎士ユーリット・ファベル殿。大至急、家に帰還されたし。

ロベルト・ファベル》

「…兄上…。」

いつも父が再三に渡り帰還の依頼書を、ウザイほどギルドに送っていたのだが、今回は一番上の兄の依頼にユーリットは首を傾げた。

あの穏健な兄が何故ギルドに帰還の依頼書を出したのか…ますます気になる。

もしや病弱な母に何かあったのだろうか…。ユーリットは五年前の出来事を思い出し、胸に苦い気持ちが広がった。

5年前、ママレカ公国のファベル伯爵家は借金で首が回らない状態に追い込まれていた。

ユーリットの父、ユリアス・ファベルは事業に失敗し、家財の殆どを失った。

使用人も雇えず、領地は稀にみる不作で八方塞がり…このままでは終わりだと言うときに、心労が溜まったユーリットの母は倒れてしまったのだ。

医者にみせる金もなく、途方に暮れていたユリアスと兄二人を見ていたユーリットは、このままでは駄目だと、一大決心をして家を飛び出し冒険者ギルドの冒険者になった。

幸い、ユーリットは祖父から剣をみっちり教えられていていたので、ギルド内でも頭角を早くに現し、１５歳で家の借金まで返してしまった。

また、冒険者の仲間達からも色々な技術を教えられたせいか、野外戦闘や魔法まで習得し、今では《黒剣のユーリット》と恐れられるほどの実力者として成長している。

『しばらく、家に帰ってねーんだから、そろそろ帰ってもいいんじゃね？』

「……。」

腰に帯びた相棒の言葉にユーリットは、憮然としたまま、依頼書を掲示版から剥ぎ取ると、カウンターへと向かう。

「あら、ようやく帰る気になったの？」

「…はい。母の容体が気になりますし」

「依頼は確かに受諾したわ。無期限の依頼だから、しばらくノンビリしてきなさいな。あんた最近働き詰めだから良い機会よ。」

「はい…」

ギルドマスターのエナに、複雑な表情を浮かべたまま一礼すると、ユーリットは外へと出る。

なんだかとてつもなく嫌な予感がしたが、母が心配なので渋々ながら家へと向う準備をするため、宿へと向かった。

ユーリットの出ていく背中を見送ると、エナは依頼書を屑籠に丸めて放りこみ、苦い表情でユーリットが出ていった扉をみやる。

「はぁ…ごめんね。ユーリット」

エナはカウンターに肘をのせ、溜め息をこぼし、ぽつりと誰にも聞こえないように呟く。

ユーリットはエナに取っては可愛いい妹分だった。

控え目で真面目な性格だったが、どんな小さな仕事も嫌な顔をせずに受けて、必死に働き、魔法騎士にまで登りつめた彼女を、ギルドのメンバー達は皆大切にしてきたが、今回ばかりは守りようがなかった。

エナは、冒険者の登記書類の棚からユーリットの登録書を取り出すと、思いっきり縦に裂いて、先程の依頼書と同様に屑籠へとそれを入れた。

序幕（後書き）

《騎士の家門》

戦闘能力の血の祝福では最高と言われています。

この血の祝福を持つ人間は戦闘能力に特化しており、通常の人間の5倍の身体能力をもつ。（女子は訓練しないと発揮できません）

そのため軍人では将校に多い。

《術士の系譜》

魔力を強く宿した人間が持つ祝福。母から子に遺伝しやすいので血の祝福と同類扱いになっている。

《王権の王冠》

王家がもつ特殊な祝福。覇気や統率力をＵＰする。嘘が見抜け、状況判断や行動力などカリスマ性を持つ…ｅｔｃ

などなど

一幕（前書き）

ユーリット・ファベル（１７）

・身長１５７ｃｍ
・体重４６（鎧抜きで）

・容姿

白髪に紫色の瞳で、少し猫っぽい

・血の祝福

《術士の系譜》と《騎士の家門》

・師の相伝

いろいろ

・資格称号

魔法騎士

・二つ名

《黒剣のユーリット》

備考

小さな頃から祖父に鍛え上げられたせいか超人離れした体力と身体能力を持つ。
素直で真面目な性格なので、ギルドのメンツから色々な技能を教えて貰い微最強。

物静かで争い事を嫌うが、容赦はしない。

一幕

ユーリットは魔法騎士と呼ばれる称号資格がある。

魔法騎士とはそのまんま魔法が使える騎士のことで、攻撃にも防御にも特化した称号資格であるが、なりたいと思ってなれるものではない。

魔法騎士になるためには二つの血の祝福が必要になる。血の祝福とは、神々から祝福された人間の家系で、産まれた時から資格を持つことを血の祝福と言う。

ユーリットの母のエリーゼは魔術師だったので《術士の系譜》と言う血の祝福がある。つまり、魔術師の血筋なため、ユーリットも魔術が使える。ユーリットの父、ユリアスも《騎士の家門》という武術が特化した祝福を持つ。

つまり両親の祝福を両方受け継いだので、ユーリットは魔法と剣術を得意とする騎士の称号を得ることが出来たのだ。

血の祝福はこの世界の人間が誰でも持つが、《騎士の家門》や《王権の王冠》などの祝福は数はあまり多くはない。

血の祝福とは逆に、師から弟子への技術の継承をすることで、資格を得られる事ができる。これを師の相伝と言い、こちらは血の祝福とは違って数多く存在する。

ファベル家は代々《騎士の家門》の血統で、歴戦の勇士が多くユーリットの祖父エドワードは将軍職についた程の傑物だった。
父は軍職にあるものの完全な裏方で、軍部の補給物質の運搬を指揮している。
兄達もみな騎士団に就職したが、まだまだ新人なので下っぱ騎士といったところだ。
多分、純粋な武術の腕ならユーリットの方がはるかに強いのだが、五年間家に帰っていないユーリットはそれを知らない。

ママレカ公国の南西の港町エレナダを出発して三日後、ユーリットは故郷のバーデンファベルに到着した。
屋敷はバーデンファベルの街の北側にあるため、街の外壁の南門から入らなければならない。

ユーリットは南門を通過すると、フードで目立つ頭部を隠し、慣れ親しんだ中央通りを馬の手綱を引きながら、ゆっくりと歩く。
五年も経つと街の様子もだいぶかわり、以前より賑やかな活気を取り戻したバーデンファベルの街を見ながら、ユーリットは微かに口元を緩めた。

『ユーリット、ここがお前の故郷か？』

「…うん。ヴァルは初めてだっけ」

『お前と出会った魔謀の森は反対方向だかんな。お前の仕事は殆ど

南と西側が多かったし…こっちはあんま来てねぇな』

黒剣の相棒に「そう」と返すと、ユーリットは街の北の高台にある屋敷に視線を向ける

バーデンファベル北舘。ファベル家に代々受け継がれてきた歴史あるその屋敷は、街を見下ろす様に建てられていた。

『…ボロいな』

「うん、ボロいね」

正直な感想を言う、相棒にユーリットは苦笑した。

数々の依頼をこなし、父がこさえた借金を全て返しきった彼女からすれば、ボロい舘を見ると辛い返済をした五年間の出来事を思い出すのだろうか、ユーリットの声は微かに震え、瞳は潤んでいる。

ただひとつ守りきったボロい舘が、やけに小さく見えてユーリットは、涙をそっと拭った。

「ユーリットぉおぉ！」

扉を開くと、涙を垂れ流し、こちらに突進してきた父親を避けると、出迎えた懐かしい面々に挨拶をする。

「おかえりなさい。ユーリ」
「ただいま帰りました、母様」
「おかえりユーリ。」
「久しぶりだな」
「お久しぶりです、ロベルト兄上とルイス兄上」
ユーリットの顔にそっくりな母と、背が高くなった長兄のロベルトと、次兄のルイスにきちんと挨拶をする。
「ただいま父上。」

「ゆ、ユーリット…。」

ユーリットは、一応父に挨拶を言うと、フードがついた外套を脱ぐ。すると腰に帯びた漆黒の剣の姿が表れ、家族の視線はその剣へと向けられる。
「これが、噂の黒剣か。成る程確かに真っ黒だな。」
『…ユーリット、誰だこいつは』
「…っ！？」
「しゃ、喋った…？」

いきなり剣から若い男の声が聞こえ、二人の兄はギョッとして、ユーリットの腰の剣を仰視する。

母のエリーゼは魔術師なためかその剣の正体が分かったようで、立派に独り立ちした娘に寂しげな笑顔を向けると、そっと抱き寄せた。

「ユーリット、貴女…魔剣の主になったのね？」

「…はい」

「「「魔剣！？」」」

復活した父親と二人の兄がハモる中、当の本人はゲラゲラと笑い声をあげている。

『やっべーマジでハモったし、流石親子！間抜け面もそっくり！！』

「…喋れると言うことは名のある魔剣とお見受け致します。私はユーリットの母、エリーゼと申します。よろしければお名前を伺っても？」

『俺の主の母なら礼儀は無用だ。俺はヴァルフリート。転換のヴァルフリートだ。宜しくなおふくろさん』

「ユーリット…お前、《トルギストフの聖魔十剣》だと知ってて契約したのか？」

「ううん…森で拾ったら契約してくれって言われたから契約した。」

トルギストフの聖魔十剣とは、鍛治の神と呼ばれた鍛治師トルギストフ・ハーブェイが鍛えた十本の剣で、各々意思をもち、主を自ら選ぶという。

十本のうち五本は魔剣、もう半分は聖剣と呼ばれている。

聖剣と魔剣…どう違うかと言うと、剣に宿っている魂が違うのだ。聖剣は聖霊の魂がやどり、魔剣には太古の魔族の魂が宿っていると言う。

一本ではあまりにも強力すぎるため、トルギストフは魔剣と聖剣を夫婦剣として互いに封じあえるように二本一対に造ったと言われているが、今では殆どはちりじりになり、何処にあるかも不明なためそれが真実かどうかは解らない。

まさか身内がその十本の中の一本の主になっているとは、露知らず、エリーゼ以外の三人は顔色を蒼白にさせていた。

「あれはあれか？…親父の呪いか何かか？私の可愛いいユーリットが魔剣の主とか、マジ泣きそう。私がちゃんとしてればユーリットは今頃立派なレディに…」

「いやいや父上、さすがに剣術馬鹿なお祖父様でも予想外だったと思うよ。てか、ユーリットは立派なレディだからね」

「…ルイス。父上の妄言に付き合うな。魔剣殿、私はロベルト・ファベル。ユーリットの一番上の兄です。以後お見知りおきを。」

「あ、俺は次兄のルイスです。よろしくね」

『おう、よろしく』

二人の挨拶に朗らかに返す陽気な魔剣に、二人は笑みを溢す。

控え目で大人しい性格の妹にはある意味ぴったりな剣かもしれない。魔剣なのにどこか人間臭くて、明るい性格は実に親しみやすかった。

「ユーリット、今日は疲れただろう。呼び戻した理由は明日説明するから、今日は自分の部屋で休むといい。魔剣殿も手狭な屋敷ですがごゆるりとしてください」

「はい。」

『ぶっちゃけユーリットの腰にぶら下がってただけだから…疲れては居ないんだが…ありがたく休ませて貰うぜ』

現実に帰ってきた父親にようやくまともな返事を返すと、ユーリットは一礼すると、自室へと向かった。部屋は綺麗に掃除されており、五年間と変わらぬ模様にユーリットは安堵した。

父のユリアスは乙女趣味で、ユーリットにアマアマなレースやピンクのものを着せたがる。毎回ユーリットが嫌がるので諦めていたが、五年間部屋は無事だった様だ。模様替えされていたら、迷わずエレナダに帰っていただろう。

ユーリットは甲冑を脱ぎ、騎士服のまま部屋の長椅子に横たわると瞼を閉じる。

「ヴァル、夕食になったら…起こして。」

『へいへい。』

「……絶対だよ？」

『へいへい』

いまいちやる気のかけた返事にユーリットは気にも止めずゆっくりと目を閉じた。

一幕（後書き）

父親の借金はおよそ日本円で３０００万ぐらいです。

ですがギルドの仕事で高額なものを六回か七回うければ返せる額です。

ヒロインは１１歳からギルドで働いてますので、小さな仕事から大きな仕事まで満遍なく五年間受けてたら借金は余裕で返せるんです。

この世界では多分冒険者が一番手っ取り早く稼げる仕事です

二幕（前書き）

・トルギストフの聖魔十剣

現在４本は消失、６本が現存している。
ヴァルフリートとユーリットの出会いは別の機会に出します

・ファベル家一覧　・

祖父・エドワード
祖母・ブリジット
父・ユリアス
母・エリーゼ
長兄・ロベルト
次兄・ルイス
末娘・ユーリット

※祖父のエドワードと祖母のブリジットは既に故人です

二幕

早朝４時、まだ朝日も昇らない暗い道を馬車がある一軒の舘へとやってきた。

ロベルトはそれを待っていたかのように、手にランプを持ち、来訪した馬車を使用人と共に出迎える。

馬車は家の玄関先で停車すると、中から３０代ぐらいの黒いドレスに身を包んだ女性が、馬車から降りてきた。

「お待ちしていましたマートック夫人。」

「ごきげんよう。ロベルト様。妹君が御帰還されたとお聞きし急いで王都を出たのですが、何分急だったためにこのような時間に到着とあいなりました。申しわけありません。」

「いえ…さぞお疲れでしょう。どうぞ中へ。暖かい紅茶をお入れしましょう。」

皆寝静まる早朝にやって来た客は、そっと屋敷を見上げると、ロベルトの後に続き、歩きはじめた。

「おはよう…ヴァル。」

『ふぁあ…もう朝か。おはようさん。』

ユーリットはベットから起き上がると、壁に立て掛けた相棒のヴァルフリートに朝の挨拶をする。

ベットから降りてクローゼットを開けると、母が揃えたのかシンプルで趣味の良いドレスが何着かあり、水色のドレスを選ぶと早速着替えることにした。

ちょうど支度を終えた頃、ドアのノック音が部屋に響き渡り、ユーリットは扉へと向かう。

最近雇い入れた使用人が朝食を伝えにでもやって来たのだろうか…？

扉をあけると、黒いドレスを着た知らない女性が立っており、ユーリットに膝をやや屈めて会釈した。

「…？」

「失礼いたします、私は王宮女官を拝命しておりますサリア・マートックと申します。」

「お会いできて光栄ですマートック夫人。私はユーリット・ファベルと申します。以後お見知りおきを」

王宮女官と言うことは、貴族の未亡人だ。ユーリットは冷静に会釈を返す。それをサリアは目を細めてジッと見つめると何か納得したのか、軽く頷いた。

というか、何故田舎街に、しかも我がボロいファベル家の屋敷に王宮の女官がいるのだろうか。しかもいきなり朝一番でユーリットの部屋に訪問したのは何の目的があってのことなのか…。ユーリットは内心、慌てたが、長年の経験上、対応は迅速に冷静に対処するのに慣れていたため咄嗟に挨拶出来たのは不幸中の幸いだろう。

しかし、ユーリットは未だに状況が理解できずにいた。

「あの？」

「失礼、想像したよりも華奢な方だったので…。不快になられたら申し訳ありません。よろしければ、食堂にご一緒いたしませんか」

「…はい。」

ユーリットは脳内でサリア＝父の客と認識するとサリアと共に部屋を出た。

「朝早くに不躾な訪問をお許し下さい。実はわたくし、公務でこちらに来たのですが、二、三貴女にどうしても伺わなければならない案件があり、こうして恥を忍んで朝食にお誘い致しました。申し訳ありません」

つまり、個人的に聴きたいと言う事は、ユーリットの家族の前では聴けないことだ。

現在この屋敷には三人の召し使えがいる。ユーリットが借金を返してから雇い入れた召し使い達は恐らく今頃は朝食の準備で厨房にいるだろうし、兄と父達は客を迎える準備で忙しいはずだ。

それを把握しているなら、この女官は頭が切れる人なのだろう。

人気がない朝の廊下を歩きながら聴くと言うことは、よほど急ぎの案件と言うことか。

「驚きましたが、不快には感じてはおりません。…私に聴きたいこととは何でしょうか。」

「はい。ユーリット様は武術が得意とお聞きしましたが、他に女性貴族の嗜みは？」

女性貴族の嗜みと言うことは芸事だろう。ユーリットは昔から祖父との剣の稽古の他にも芸事を学んでいたが、絵画と音楽は壊滅的といっても良い。しいて言うなら

「…刺繍と、調香は得意です。ダンスも嫌いではありません」

「結構。ご様子からして、読書や詩作も不可ではなさそうですね。」

「ええ、まあ」

「…もうひとつ。貴女は処女ですか？」

その質問にユーリットも驚いたのかバッとサリアを見上げた。

「…。」

恥ずかしくなり目を反らして無言で頷けば、サリアは眼鏡を押し上げ、容赦なくユーリットを見下ろす。

「では、意中の男性もいらっしゃらないのですね？」

「はい。と言うか…あのサリア様、何故そのような質問を？」

「それは朝食の時にご説明いたします。私がここにいる理由を、お父上から直接お聴きするほうが宜しいでしょう。それと数々の非礼な質問をした事をお詫びいたします。」

立ち止まり、頭を下げるサリアにユーリットは困った様子でそれを見下ろした。

（…ヴァルを連れてくれば良かった。）

喋り下手なユーリットは、気まずい空気に返す言葉が見つからず、とりあえずサリアを食堂へ促すことにした。

食堂につくと既に両親と兄たちが揃って二人を待っていた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「おはよう。ユーリット」

食卓に並んだ朝食を見るとユーリットはサリアに上座を進めると、自分は下座の次兄の席へとつく。

全員が席に座ると、恒例の祈りをささげ、各々朝食に手をつけはじめる。

「…さて、ユーリット。聴きたい事が多々あると思うがまず、お前を呼んだわけを説明しよう。」

珍しく真面目な父にとユーリットは頷くと手を止めて、ユリアスに視線を向ける。

「…実は半年後の春月に第一公女、アリエル様が、隣国エリストナ王国のエルンスト王太子の側妃として嫁ぐ事になった。」

ユーリットは表情には出さずに内心で首を傾げた。

ママレカ公国は小国だが、その公王家の血には間違いなく《王権の王冠》が流れている。

それを抜かしても一国の公女を王太子妃ではなく、側妃に嫁がせるとはママレカ公国に喧嘩を売っているとしか思えない。

「…恐らく何故、側妃なのかと思うだろう。しかし、これには深いわけがある。

アリエル様の母君、第二妃のハミエラ様は元農民だとお前も知っているだろう？それをあちらの五大公が気にくわないようなのだ。」

そう、現公王ロドニー二世の第二妃のハミエラは農民出身の妃なのは国内外でも有名な話だ。

しかし、ハミエラ妃が公妃になったのはその血に流れる祝福によるものだ。

ハミエラ妃の先祖は大地母神の神官で、《慈母の恩恵》を血に宿していた。

《慈母の恩恵》とはその血の祝福をうけた人間が存在するだけで広範囲にかけて、豊穣の恵みをうけることができる特殊な血の祝福で、極めて少ないものだ。

実際、ハミエラ妃と公王が婚姻を結ぶと前年度に比べて作物の収穫量が二倍になり、ママレカ公国は豊作続きだ。

最初は極めて珍しい血筋なので、ロドニー王は保護するだけが目的だったのだが、いつしかハミエラ妃と恋仲になり第二妃として迎えたのだという。

因みに第一公妃のエリザベス妃は、現公太子を産んだ後、まもなく亡くなっていたのでハミエラ妃は事実上、後妻と言うことになる。

ハミエラ妃とロドニー二世は三人の娘と二人の息子に恵まれたが、全員《慈母の恩恵》
持ちなため、年々、作物の収穫量がハミエラ妃とその子供達の相乗効果で凄いことになっており、北のクリエストロ帝国の食料危機を

救ったのは有名な話だ。

他国からの縁談の申し入れが後を絶たないぐらいなのに、どうして国を担う五大公と呼ばれる公爵達が反対するのだろうか。

ハミエラ妃は確かに身分は低いが、それにあまりある血の祝福を受けている。

その血を祝福をもつ姫を側妃にしろだなどとは、普通は言えないだろう。

「実は、ちょうど五大公には各々年頃の姫君がいてね。熾烈な正妃争いの真っ只中だったのだが、ここにきてアリエル姫と言うダークホースが現れたせいで、五大公は焦ってうちの姫様に難癖をつけてきたわけだ。」

…つまり権力争い中に、自分達より地位の高いアリエル姫との縁談が決まったことに反発した権力者どもの我欲のせいで、自国の姫が側妃として嫁ぐ事になったのか。

ユーリットは内心、アリエル姫と、ハミエラ妃に同情した。

ママレカ公国は大陸の食料庫と呼ばれるほど自然豊かで、農耕が盛んな国だが、武力は極めて低い。

そのため、現在北側の隣国、クリエストロ帝国と東側のエリストナ王国という二つの大国の庇護下にあるおかげで存続できているのだ。発言権が低いため、そう難癖つけられると断れないから仕方がない。

さぞかし、心を痛めていることだろう。
しかしながら、アリエル姫の輿入れと、ユーリットを呼び寄せた理由との接点が見つからない。

「…既に五大公の姫君が先に側妃入りはしたが、さすがにエリストナ国王も我が国に不敬だと感じているようで、五大公との折り合いがつけば、アリエル姫を王太子妃にすると国王直々に内約を頂いている。
外交的には問題はないのだが、ここでお前を呼んだ理由が関係してくる。」

そういうとユリアスは、ちらりと王宮女官のサリアに目配せをする。
サリアも心得たと頷くとユリアスから説明を引き継ぎユーリットに向き直る。

「姫様が側妃となると、五大公の姫君が既に入られている後宮に入室する事になりますが、後宮は男子禁制。
そのためアリエル姫の護衛をできる人間は当然女性という事になります。」

ユーリットはようやくそこで納得した。
つまり、ユリアスやサリア達はユーリットにアリエル姫の護衛をさせるために呼び戻したのだ。

確かにユーリットは没落気味とは言え、貴族の娘だ。その上ギルドでも働くほど武術に長けている。
権力争いの真っ只中の後宮に入ると言うことは、入った側妃は命を狙われやすくなる。何分王妃の最有力候補なら潰そうと考えてもおかしくはない。
普通の《騎士の家門》の祝福をもつ貴族でも女子が剣を持つことはまずないし、そう考えればユーリットは護衛に適役だった。

「…しかし、エリストナ王国の後宮にはある決まりがあります。」

「決まり…ですか？」

「はい。側妃の側近は女性であること。まあ、これは基本ですがここからが問題です。他国からの側妃の場合、側妃付きの側近は三種類に分けられております。
1、エリストナ王国の貴族未婚女性であること。2、未亡人であること　3、エリストナ王国の貴族と婚姻関係をもつ者…このいずれかの女性と限られています。」

つまり、エリストナ王国の後宮では王太子がいつ誰に手を出すかわからから、他国の未婚女性より、自国の未婚女性のほうが血筋の管理がしやすいので、側近はエリストナ王国の未婚女性と予め限定しているのだ。

しかし、それが嫌なら、未亡人か、エリストナ王国の貴族男性と結婚した貴族女性を側近にしろと言うことになる。

エリストナの王族は未亡人と結婚することは許されていないし、死人の妻に手を出すことを国民性からして忌み嫌うので、エリストナ王国の貴族でなくとも未亡人なら他国出身でも側近はＯＫと言うことだ。

これは過去に他国からの側妃か迎えた時にいざこざがあってそう言う決まりになったのだろう。

今回の場合、ユーリットが護衛のため後宮にはいる時、エリストナ王国貴族と結婚していなければならないと言うことだ。

ユーリットは廊下でのサリアの質問を思い出し、眉間に皺を寄せる。

「…つまり、父上とサリア様は…私にエリストナ王国の貴族に嫁げと？」

「…そう言うことだ。」

確かに１７歳は一般的な貴族女性の結婚適齢期だが、ユーリットはつい最近までギルドで働いていたので、いきなり結婚しろと言われるのは正直抵抗があった。

他国にいきなり嫁げと言われて、はいそうですかと言うには頭が混乱していたのだ。

「…もし、それを拒むとどうなるのですか？」

「この屋敷が更地になって、家名がなくなっているでしょうね。」

その言葉にユーリットは顔を真っ青にさせた。

つまりこれは《受諾しなければ家を潰すと言う》公王勅命と言う名の脅迫だった。

斜め前に座る母が、ユーリットに、今にもごめんなさいと泣き出しそうな顔を浮かべている。

散々苦労させてきた娘に、このような結婚を強制するなんて、あまりにも酷い仕打ちだ。母親にとっても今回の話は辛いものだった

実際、ユーリットが家に帰ってくるまで夫と大喧嘩していたし、毎晩枕を濡らしていた。

しかし、愛娘が帰ってくるのに泣き顔を見せるのは良くないと必死で我慢していたが、とうとうエリーゼはポロポロと涙を溢しハンカチを目にあてる。

娘に何もしてやれない自分が情けなくて、悔しくて仕方ない。

兄たちも同様、苦い表情をうかべ、父・ユリアスに至っては必死に拳を握りしめ何かを堪えていた。

そんな様子の家族をみて、ユーリットは目を伏せると、軽く息を吸って、サリアに真っ直ぐな目を向けた。

「誠心誠意、姫様に忠心を捧げ、姫様をお守り通すと誓約申し上げ

ます。」

「…誓いを受諾します。では、具体的な今後の予定を組みましょうか。」

サリアはユーリットの言葉に満足そうに優雅に微笑むと、ナプキンをその手に取った。

二幕（後書き）

サリア女史無双。

サラリと毒を出すタイプです。

次回に天敵の旦那がでます。

三幕（前書き）

拙い文章を読んで頂きありがとうございます。

今回はエリストナ側がメインになります。

三幕

エリストナ王国王太子近衛師団師団長

アルファン・ヴィ・ギャレットは目の前の王太子に、胃がきりきりと痛み。思わず腹部に手を当てて歯を食いしばる。

気まぐれで、気分屋でその上、ドSで腹黒。これが自国の王太子じゃなければとうに殴り飛ばしている。

王太子のエルンストとは乳兄弟で、アルファンの父も現国王の側近をつとめているほど、ギャレット家と王家の関わりは深い。

小さな頃から手に負えなかった王子だが、ようやく側妃を迎えて落ち着くかと思えば、ますます酷くなる一方で、王太子による被害が例年比に比べて1．5倍に増え続けている。

アルファンもユーリットとは別の意味で苦労人だった。

アルファンはトルギストフの聖魔剣のひとつ、《抑止の聖剣・オフィーリア》に主として選ばれるほどの実力のある将軍だが、強烈な性格の王太子の乳兄弟に産まれたせいか、完全に世話係を押し付けられ、王太子が問題を起こす度にその尻拭いに奔走させられている。

そのため、部下達から《不憫将軍》とか言われて、生温かな視線を向けられる始末…。

気まぐれな王太子の無理難題な注文も耐えぬいてきたアルファンだが、今回ばかりは笑って済む問題では無かった。

「殿下、すいませんがもう一度、おしゃって頂けますか？」

「お前のお嫁さんが１ヶ月後にくるから支度しなよと言ってるんだけど…。何？親父殿からは聞いてないの？」

「…残念ながら初耳にございます。」

確かにママレカ公国から半年後に王女を王太子の側妃に迎えるとは聴いてはいたが、自分に嫁がくると言うのは初耳だ。

「えっと、名前はユーリット・ファベル（１７）ファベル伯爵家の長女で、名将エドワード将軍の孫娘。小さなころより祖父から剣術を教わり、弱冠１１歳で冒険者ギルド《海の秘宝》で働き、１５歳で魔法騎士の称号を取得。竜退治１５回、盗賊、海賊の捕縛及び殲滅１８回。その他の護衛経験が豊富でついた二つ名が《黒剣のユーリット》…へぇ、お前にぴったりのゴリラ女じゃないか。」

「…と言うかなんで伯爵令嬢が冒険者やってるんですか。竜退治とか盗賊殲滅してるとか普通の令嬢がすることじゃないですよ。て言うかそれ…本当ですか？疑わしいことこの上ないんですけど」

「本当だよ。間違いない。父親の借金と、病気がちな母親の治療費のために冒険者やってたみたいだね。３千万ルークの借金を四年で

完済してて、その後は家へ仕送りしているとか…この子17歳にして壮絶な人生送っているねぇ」

ヘラヘラと笑いながら調査書読む王太子に、眉間に皺を寄せる。アルファンも思わずなんて不憫な子だろうと思ったが、自分との結婚となると話は違ってくる。「…つまり、そのユーリット殿はアリエル姫の護衛として後宮にはいるため、俺と結婚すると言うことですか？」

「そうだよ。良かったね、逞しいお嫁さん貰えて」

「全然嬉しくないですよ！何で俺なんですか！？他にもいるでしょうが！」

思わず立ち上がり抗議すれば、エルンストは気だるげに金色の相貌をアルファンに向けてニヤリッと笑う。

「みんな嫌がったから君にお鉢が廻ってきたんだよ。アリエル姫の側近の夫となる家格の貴族は、お前しか残っていないし、結婚適齢期だから丁度いいんじゃないかと、お前の親父とうちの親父殿がサクサクと纏めちゃったんだ。僕に抗議しても無駄だよ」

「…っ…」

思わず胃が痛み、項垂れるアルファンに、エルンストは王妃に良く似た甘い笑顔で追い討ちをかけるように言い放った。

「僕も嫌々お嫁さんもらってるんだから、お前も諦めてお嫁さん貰いなよ。」

その言葉はいつになく真っ当な言葉だったのでアルファンは余計に腹が立った。

普段チャラチャラしてる奴から正論を言われると余計に腹立たしいことこの上ない。

拳を握りしめて、アルファンは勝手に縁談を決めた父親に怒りの矛先を向けると、ゆっくりと執務室の扉へと向かった。

アルファン・ヴィ・ギャレット（２５）

王太子と胃痛との戦いは今日も寝るまで続く

エリストナ王国の国土は、作物を育てるには適さない土地だった。

年々クリエストロ帝国と反対に、気候が暑いために植物があまり育たない。

どちらかと言うと、鉱物資源が豊富で、鉄や金、銅などがよく取れる。

砂漠化していないのは地下水が豊富なことと、暑さに強いエブナの木がたくさん自生しているのが大きい。

そのため、エリストナ王国は北国のクリエストロ同様にママレカ公国の食糧を頼りにせざるを得ないのだ。

クリエストロは、宝石類や加工技術なら世界一の技術力を有した国で、エリストナで仕入れた材料で飾物や工芸品をつくり他国に高い値段で売り付ける。また、軍事技術も高く彼らが作る武器も主力製品のひとつだ。

軍事力ならエリストナも負けてはいない。

エリストナは世界一冒険者ギルドが多い国で、初代国王は傭兵だったことから、傭兵の国と呼ばれる猛者揃いの国だ。

もしママレカ公国に手出ししようものなら、この二つの国が黙ってはいない。

分かりやすくいうと、目の前の美味しそうな羊を食べようとすると、後ろに控える狼と獅子に逆に食い殺されてしまうと言う状況が４００年ぐらい続いている。

三国の関係は、各々良好で歴代の王族同士の結婚も多くある。

現に、王太子エルンストの母はクリエストロ帝国皇帝の妹である。

現在、夫であるエリストナ国王　バルジ？世は五人の公爵に頭を悩ませていた。

確かに王族同士の結婚は近親婚を招きやすいが、エリストナ王家とママレカ公国公家の縁談は約１５０年ぶりだ。近親婚と言うには不

適切だろう。

それなのに五人の公爵達はアリエル姫の母の出自の事などを理由に、難癖をつけてくる。

その背景にあるのは現在の王室に原因がある。

クリエストロ帝国は一夫一妻を基本としており、エリストナ王家のような後宮と言うものはない。

そのためバルジ？世と王妃が結婚する際にある確約を結んでいた。

《王妃以外の側妃をとらないこと》

それが王妃を嫁がせる時のクリエストロ側の唯一の要求であった。

その要求のおかげか王妃と国王との仲は非常に円満で、三人の子を授かっている。

面白くないのはエリストナ王国の貴族達だ。彼らは自分の娘を後宮にいれることで立場を築いてきた人間だ。

特に五大公には国王に嫁がせるためだけの娘がいたのだが、彼女らはその役目を全うできず、家格の低い家へと嫁いでいった。

現大公達はその兄や弟にあたる。姉妹達の悲劇を見てきた人間としては、自分の娘に同じ轍を踏ませたくないのは当然の事だ。

強引に後宮に娘達を捩じ込む事に成功して、いざこれからと言う時に、ママレカ公国との縁談は寝耳に水だったに違いない。

ママレカ公国も一夫一妻制が主流だ。

五大公としては、クリエストロ帝国と同様の要求をされた場合、やっとこさ後宮にいれた娘達が後宮から出されるかもしれない。

それに過剰反応をした公爵達は一致団結し、公女の王妃入室を阻止する事に同意した。

公女の血に流れる《慈母の恩恵》などどうでも良い。これ以上余所者に王室を牛耳られるのは我慢ならない。

それが五大公と呼ばれる公爵達の意見である。

まさに国益を無視した貴族らしい矜持を全面に出した、歪んだ考え方だ。これには流石の国王も辟易した。

（私情入り過ぎだろう…五大公。）

別にママレカ公国は後宮に対してなんの不平不満はクリエストロみたく言ってはいない。あちらは、どちらかと言えばお国柄的に他国の文化に自分の文化を押し付ける事はしないタイプの国だ。

確かに後宮の事は良くは思ってはいないだろうが、それを言える立場でもない。

そもそも王族の結婚とは、外交手段のひとつであり、国益に大いに影響を及ぼす一大プロジェクトだ。

本来、五大公のような貴族達が口を挟むこと事態こそ越権行為だが、中央政治に関わらない地方領主たちが殆ど五大公側についてるせい

か、増長しているため聞く耳を持たないのだ。
穏便に事を進めたい王はどうしたものかと、宰相に相談したところ、返ってきた答えは
「それ以前に王太子様をどうにかして下さい。」
と冷たい眼差しで言われてしまった。あの馬鹿息子が！と内心罵倒したが、あの性格は今更変えようがない。
ハァと溜め息を思わず溢す。
「…こうなったらアルファンとその嫁に頑張って貰うしかないか」
息子の側近であるアルファン・ヴィ・ギャレットにアリエル姫側の側近になる少女ユーリット・ファベルとの結婚を決めたのは、息子と姫をくっつけさせて早く子供を作らせるためだ。
側近同士が夫婦なら、お互いの主の情報交換とかやり易いだろうし、それとなく二人の後押しをしてくれる…はず。
流石に五大公もエルンストとアリエル姫の間に第一子が産まれたら、アリエル姫を王妃にすることに文句を言えないだろう。
アルファンとユーリットには是非とも二人の恋のキューピッドになって貰わねば！！
そして、可愛いい初孫を今度こそ理想的な王子に…いや姫でもいい。
父親に似ないよう私が育ててみせる！

バルジ・ファタ・エリストナ。（４５）

やや薄くなった髪の毛と戦う王の背中には、充分五大公に匹敵するほどの私情が混ざった決意が宿っていた。

三幕（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

王太子のキャラクターは強烈でサクサクっと書けました。

父親の国王を親父殿と呼びにしたのは、何となくです

多分公式の場ではきちんと「父上もしくは陛下」と呼んで猫かぶってます。

体面とかどうでも良さそうな人だけど、アルファンに言われて渋々そうしてます。

国王陛下も中々に濃い人なのでやっぱり書いてて親子だなぁと感じます。

では次回

四幕（前書き）

閲覧、並びにお気に入り登録ありがとうございます。

姫様がやっとこさ登場します。

誤字脱字があったら改善いたしますので教えて下さい

四幕

1ヶ月後の婚礼までに、軽いエリストナ王国の伝統や風習や、礼儀作法を学ぶためにユーリットはサリアと共に王都に訪れていた。

今、彼女が着ている服は可憐な藍色のベルベット生地のドレス、黒いパンプス、控えめな黒いリボンが良く似合っている。しかし、一見深層の令嬢のような姿だが腰に帯びている真っ黒な剣は、何処か異質であった。

『しっかし、あのユーリットが結婚とは時間が経つのがはやいねぇ』

どこかの居酒屋の親父みたいなヴァルフリートの台詞に、ユーリットは、微笑んだが、向かいに座るサリアは苦々しい表情で、ヴァルフリートをみる。

「…相変わらず、人間臭い魔剣ですね。」

『だって、魔族に転生する前は人間だぜ? 人間臭くて当たり前だ。巨乳女官』

「不快な呼び名で呼ばないで下さい。ユーリット殿、どうして斯様な魔剣と契約したのですか」

サリアは、この王都にきてからユーリットの事を様付けで呼ぶのをやめた。

サリアもアリエル姫に随伴するので、同じく側近として随伴するユーリットを様付けに呼ぶのは、同僚としてよそよそしいし、姫と区別するためあえて呼ばない方がいいと考えたのだろう。

そのせいか互いに遠慮がなくなった。

「…ヴァルと一緒にいたいと思ったので…どうしてと言われても。」

「…簡潔な理由すぎて、余計に理解できません」

サリアは額に手をあてると、チラリと馬車の窓の外へと視線を向ける。

近づいてきた王城を馬車の窓で確認するとサリアはユーリットに向き直る。

「…ユーリット殿、実は魔剣殿の存在は姫様にはまだ話してはおりません」

「…？」

「刃物を見るだけで怯える方なので、喋るとなると…。」

「あぁ。」

ここ王都に来るまでにユーリットはアリエル姫の人となりを予めサ

リアから聞いていた。

アリエル姫はハミエラ妃がまだ公妃にあがる前、ロドニー王との恋人期間中にできた姫君だった。

農民であったハミエラ妃とロドニー王との結婚の道のりには当然障害があり、それを乗り越えて結婚するのに6年もかかった。

ユーリットはその期間中に産まれた姫君で5歳まで、近くの村で育てられていたという。

のんびり村で育てられていた姫君の元に、いきなりフル武装した騎士達が大勢迎えにきたら、姫でなくともビビるのは当たり前である。

それ以来、アリエル姫は騎士がどうも苦手らしく見ただけでも涙を浮かべるらしい。

性格的にも内向的で、良く図書館に引きこもるびびりで泣き虫な姫様の事だ、大いにヴァルフリートを怖がるかもしれない。只でさえヴァルフリートの姿は墨のように真っ黒で無気味だ。

皆が皆、ヴァルフリートみたいに喋る魔剣を受け入れるわけじゃない。気味悪いと言う人間は沢山いるのをユーリットは知っている。

だが、ヴァルフリートはユーリットにとって大切な相棒だ。姫様に嫌われたくはない。

それに護衛となる以上、ヴァルフリートは常に不可欠な存在なので、姫様には我慢して貰うしかない。

「すいませんが、私は隠したくありません。ヴァルにも姫様を守ってもらう以上、慣れて頂いた方がいいと思います。」

「……一理あります…急に出すより最初に出しておいた方が…まだ傷は浅くてすみますかね…。」

「珍しいですね。サリアさんがそんなに悩むなんて…。」

ユーリットは王都への旅の途中からサリアとは、打ち合わせで話し合っていたのでだいたいサリアがどういう人間かは把握していた。打てば響くような素早い対応力に、物事を現実的な視線からみて白黒はっきりわける頭脳。

王宮女官でも女官長になれる人材だ。そんな彼女が酷く気を揉むような…酷く困惑している姿は珍しい。

「姫様に会えばわかりますよ…。」

『…とてつもなく嫌な予感がするんだが…』

「…うん。」

有能な彼女をこれほど悩ませるアリエル姫様に、ユーリットは会いたくないような、会いたいような微妙な気持ちで、深く溜め息を吐くサリアを見つめた。

赤き城・ヴァーミリオン城。

２５００年前に赤衛鉱石と呼ばれる鉱物で作られたその城は、ママレカ公国と名を変えても、所有する王家が変わっても王宮としての機能は健在で、世界でも五指に入るほど堅牢な城として有名である。

一見、赤茶の煉瓦のようだが、この世界で一番堅い鉱石で造られている。熱にも強く、全く焦げもしないので別名、火防石とも呼ばれている。

そんな堅牢な城は意外と素朴なつくりをしている。

森と一体化した城の空気は穏やかで、華美な装飾はあえてされておらず、内装もそれに沿った造りをしている。

日本で言うところの「わびさび」といった感じだろうか。

ユーリットは一目でこの城が好きになった。

サリアの先導で、王宮の廊下を歩いていると前方から誰かがやってきた。

質素な緑のドレスを着たぽっちゃりとした体系の優しそうな中年女性で、若い頃はさぞ可愛らしい人だったのだろう。

栗色の髪を纏め、頭には額には緑柱石と金でできたサークレット。

薄い萌黄色の透けたベールが品の良さを醸し出している。
傍らには１０歳ぐらいの金髪の美少年がおり、こちらをジッと見つめている。恐らく親子なのだろう。顔立ちがそっくりだ
サリアはさっと道をあけ、黒いドレスの裾を軽くあげて、その二人に頭をさげ一礼する。　ユーリットは慌ててそれに習い二人に一礼した。

「ごきげんよう、サリア。やっと帰ってきてくれたのね？」

「遅参いたし、申しわけございません公妃様。マルセル様とお散歩ですか？」

「ええ。今日は天気が良いから。それより、貴女が居なくてアーちゃんがまた引きこもっているのよ。…困ったわ半年後に結婚だというのに。」

「…左様でございますか。さっそく姫様の元に行って引き剥がして、部屋に連行いたします。」

「……。」

『……。』

ヴァルフリートとユーリットは思わず口を引き結んだ。ツッコンで

はいけないと脳内が警告していたからだ。
必死に空気になるのに努めていると、ハミエラ妃がこちらに視線を向けた。

「サリア、こちらの可愛らしいお嬢さんはどなた？」
「は、彼女はアリエル様の護衛として本日より仕える事になったユーリット・ファベル嬢です。ユーリット殿、この方々はハミエラ妃殿下とマルセル第三公子様です。」

「お目にかかれて光栄でございます。妃殿下と公子様におかれましてはご機嫌麗しく…」

「…貧乳だな。」

ユーリットが挨拶の口上の途中に、ハミエラ妃の傍らにいた天使のような容姿の　公子がサラリと爆弾発言をした。
思わずユーリットは絶句。ハミエラ妃がマルセル公子の頭をグーで殴るまで機能停止していた。

「ご、ごめんなさいね。ユーちゃん。マルちゃんたら生意気な盛りなもんだから…。こら、ユーちゃんに謝りなさい。」

「えー…貧乳は事実じゃん。」

「マルちゃん？」

「ゴメンナサイ。ユーリット」

拳を握りしめる母の姿にマルセルは高速で謝ると、プイッとそっぽを向いてしまう。

『っぶはははッっ！！げっ、げほっ』

「ヴァル。」

馬鹿笑いするヴァルフリートにユーリットは窘めると、そっぽを向いていたマルセルが、驚いたように此方を見やる。

「は？今の誰？！」

『っ…ここだよここ！』

ユーリットの腰に視線を向けると、マルセルは目をキラキラと輝かせる。

「すげぇ！お前、剣だよな。喋れるの？」

『おう！魔剣だからな』

「え、魔剣…？」

「マルセル様。この剣は《転換の魔剣ヴァルフリート》といってトルギストフの聖魔十剣のひとつ。
そのヴァルフリートの主であるユーリット殿は、姉君の護衛騎士となられる程の凄腕の魔法騎士。これ以上生意気な口をきけば骨も残さず焼かれますよ？」

「や、焼くのか？」

「焼きません。」

サリアの説明に間髪入れずにツッコミをいれたユーリットの表情は苦々しい。

公族なんぞを焼いたら一族と屋敷が焼かれる。

それに、子供の言葉に腹をたてるほどユーリットは狭量な人間ではない。

サリアの黒い笑顔に怯えたのか、はたまたユーリットに怯えたのか、マルセルは母の後ろに隠れるとカタカタと震えている。
「ふふっ、サリアったら相変わらず見事な躾方だわ。私ったらすぐに手が出るから貴女を見習わなくっちゃ。」

「いえ、わたくしなどまだまだ…。」

（…遠慮するとこ、違う。というか見習わなくていいから公妃様）

ツッコミを入れるのに口に出さないのは、ユーリットが空気を読める人間だからだ。

「ユーちゃん。アーちゃんはちょっと問題がある子だけど、とっても心根は優しい子なの。あの子、ちょっとお間抜けさんだからサリアと一緒に支えてあげてね」

「は。身命を賭してお守り申しあげます。」

「ふふ。頼もしいわ。そうだ！貴女のため騎士服と鎧を用意しなくてわね。男装の女騎士、素敵だと思わない？」

「ええ。素敵ですわ妃殿下」

「ならば、善は急げね。わたくしの方で手配しておくわ。後で採寸しましょうねユーちゃん。」

「あ、あの公妃様…私は…」

「ね？ユーちゃん。」

「…はい。公妃様」

有無を言わせない公妃の笑顔に、ユーリットは根負けして頭を下げた。

『…濃いな』

「…うん、濃い。」

ハミエラ妃とマルセル公子と別れた二人と一本は再び王宮の廊下を歩いている。
やけにフレンドリーなハミエラ妃は初対面からユーリットをちゃんづけだし、マルセル公子に至っては外見と中身との落差が違い過ぎる。

姿は理想的な気品溢れる王子様、脳は生意気なガキんちょ。
恐るべしママレカ公国の公族。実に濃い。

魔剣も主人公も霞む濃さだ。

ユーリットはアリエル姫のが会うのが早くも怖くなっていた。

「つきましたわ。」

サリアはある部屋の前に立ち止まると、その部屋のプレートを見上げた。

図書館とプレートに書かれた扉に、ユーリットは首を傾げる。

「ここに姫様がいらっしゃるんですか？」

「ええ。姫様は無類の本好きで、一度入るとここから出てきません。…そうですね。これからは貴女にも手伝って頂く形になりますが…よろしいですか？」

「手伝うとは…いったい何を。」

「大丈夫です…指示を出しますから。わたくしも、もう歳ですから…正直、手伝っていただくと有難いのですけど」

「…良くわかりませんが、わかりました。」

「貴女のその空気が読めるところは助かります。」

そう言うと、サリアは観音開きの扉を空けると、ツカツカと真っ直ぐな足取りで歩きはじめる。

ユーリットは慌ててその後に続くと、その広さに目を見開く。

天井まで突き抜ける広い空間、壁に埋め込まれた本棚には沢山の蔵書が並び、それが三階…いや四階ま続いている。

国営図書館並みの蔵書の数に、目を白黒とさせながらユーリットはサリアの後に続く。

サリアは一番上の階まで登ると、一番日当たりが悪い角へと向かい、

そこにいる何かを見下ろした。
ユーリットは、サリアの後ろからそれを見ると思考停止した。
くすんだ金色のモップみたいな生き物がそこにいた…。
紫色のドレス（と言うには薄汚れいる）、ボサボサなくすんだ金髪（後頭部の髪の毛がなぜか顔を隠している）本を離すもんかと言わんばかりに抱きしめる丸まった華奢な身体。
どうやら寝ているらしく、「すうすう」と寝息が聞こえる。
ぺたりと床に座り込み、額を床に付けて器用に寝ている姿に、ユーリットは思わずドン引きした。

そんなユーリットを尻目にサリアは、息を大きく吸い込むと声を張り上げた。

「起立！！」

「は、はひ！？」
驚いて、跳び起きるとモップみたいな生き物はピシリと背筋を糺す。
まるで軍隊の兵士のような姿にユーリットは頭が痛くなった。
髪はフワリと背中に戻り、ようやくその顔が見ることができた。
フワフワした波打つ金髪に、新緑の葉のような綺麗な瞳。白く透けた肌に、薔薇色の頬。
春を告げる妖精のような可愛らしい顔だが、残念なことに額には床

についていた跡がうっすら赤くついており、口元には涎…顔や髪、ドレスは埃まみれになっている。

アリエル・ザレア・ママレカ（１５）

彼女こそママレカ公国第一公女にして、ユーリットが生涯ただひとりの主となる少女であった。

四幕（後書き）

自分の作ったキャラクターは悪役含め大抵思い入れがありますが…マルセル君は特にお気に入りです。

外見は貴公子中身は残念な美少年は書くのが楽しいです。

マルセル君は実は最初、甘えん坊をイメージしてましたが、生意気にしちゃいました。（後悔はしていない）

ユーリットが濃いキャラクターの被害者になりつつあります。生暖かな目で見守って頂ければ幸いです。

五幕（前書き）

閲覧、お気に入り登録ありがとうございます。

今回から姫様編に差し掛かります。

五幕

「ごめんなさい！ごめんなさい！こんなゴミ虫生きててごめんなさいい！！」

それがユーリットの主アリエル・ザレア・　ママレカの第一声だった。

図書館でサリアに起こされたアリエル姫は、サリアとユーリットの姿を寝惚け眼で見ると、サーっと顔を真っ青にさせて凄い勢いで謝り出したのだ。

「……。」

『……。』

無言になるユーリットに、相棒としてかける言葉が見つからないヴアルフリート。

嫌な予感ほど当たるものはない。

「姫様。何日部屋に戻られていないのですか？」

慣れているのか、サリアが淡々と尋ねるとアリエル姫は指で日にちを数え始める。

「…王都からバーデンファベルまで速馬車で2日。ユーリット殿の屋敷には二日間滞在し、通常の馬車で此方に戻ると4日。8日前後といったところでしょうか？」

その言葉にアリエル姫はコクコクと可愛らしく頷いた。

こころなしか、酸っぱい臭いがこちらまで漂ってくる。

「…食べ物は？」

「上の兄様が」

「そうですが、それはようございましたね。…覚悟はできてますか？」

「ご、ごめんなさい、サリア。この本だけ！まだ途中なの。」

「ユーリット殿」

「はい。」

ユーリットは何をすればいいのか自然とわかった。

わかってしまった。残念なことに

ゆっくりとアリエル姫に近づくと、初対面のユーリットにアリエル姫は戸惑う表情を浮かべる

「だ、誰？」

「ユーリットとお呼び下さい。本日より姫様の護衛騎士としてお仕えすることになりました。」

ユーリットは、アリエル姫の前に立つと、片膝をつき、震えているアリエル姫の右手を取るとその指先に口付ける。

「《我、ユーリット・ファベルはその真名を貴女に捧げ、その命を貴女に捧げ、騎士の家門の名の元に、アリエル・ザレア・ママレカに忠誠を誓い申しあげます》」

これは、騎士が主君に忠誠を誓う儀式である。

この誓いは生涯解けることはない主従の誓い。

一見神聖な光景だが、忠誠を誓った姫君が埃まみれでボサボサであるのが残念でならない。

「ひっ…き、騎士！？」

ザザザっと後退るアリエル姫に、ユーリットは立ち上がり、アリエル姫の元へと迷いのない足取りで歩み寄る。

『…ユーリ、この姫さん怖がってるぞ、大丈夫か？』

「け、剣がっ！？しゃ、しゃしゃ喋って…！」

『……噛みまくってんなぁ』

壁際までユーリットに追い込まれ、あっけなく逃げ場を無くしたアリエル姫は、可哀想に顔を真っ青にさせてボロボロと涙を溢している。

ユーリットを怯えた表情はまるで捕食される小動物のようだ。

ユーリットはついさっき、傅き忠誠を誓ったはずの主を虐めるようで、心苦しかったが、サリアの目が「行け」と言っているため、仕方なく追い詰めてしまった。

さながら牧場で羊飼いに命令されて、柵に羊を追いこむ牧羊犬になった気分だ。

「姫様、ユーリット殿は今日から姫様を守る方。今はドレスですが、明日からは甲冑姿になられるんですよ？今から怯えてどうするんですか。」

「ひぃっ…だって！」

「姫様、良く見て下さい。かつて幼い貴女を取り囲んだ筋肉達磨とユーリット殿は違います。忠誠を誓った騎士に対して失礼ですわよ」

そのサリアの凛とした言葉に、アリエル姫はピタリと泣くのを止めてユーリットの姿を恐る恐る見る。

かつて幼い頃自分を取り囲んだのは、ガタイが良い背が高い男達で、みな顔が厳つくて怖かった。

ユーリットはその騎士達とは違い、ほっそりしていて、自分と変わらない小さな身体をしている。

淡々としていて無表情なのは少し怖いが、涼やかな容姿の少女だった。

「…あれ？」

騎士と言う単語にトラウマをぶり返したアリエル姫だったが、トラウマであったマッチョな騎士とユーリットの姿が違うことに気がつき、カアアっと羞恥で頬を赤く染める。

「わ、わたくしったら…ごめんなさい。」

「いえ…こちらこそ、御無礼いたしました。」

頭をさげるユーリットに、アリエル姫はふるふると首を横にふった。

「いいえ。わたくしが悪いの。…改めてまして、わたくしはアリエル・ザレア・ママレカと申します。さっきは怖がってごめんなさい。ユーリット」

確かにハミエラ妃が言っていた通り、根は素直な姫君のようだ。

アリエル姫はふと、ユーリットの腰に帯びているヴァルフリートに気がつき、視線を向けると表情が強ばった。

「こ、これは…さっき喋ってた剣？」

「はい。私の相棒のヴァルフリートと申します。本日より私と共にアリエル様をお守りいたします。」

『よろしくな！姫さん』

アリエル姫はジッとヴァルフリートを見つめると、再びユーリットに恐る恐る視線を見上げる

「…ヴァルフリートって…トリギストフの聖魔十剣の？」

「はい。」

「英雄イーリアスの魔剣？」

『…良く知ってんなぁ。』

ヴァルフリートの言葉にアリエル姫は完全に機能停止して、固まってしまった。

「…知らなかった。有名なの？」

『いんや。元相棒はちらほら歴史に出てくるが、俺はほとんど無名だぜ？イーリアスの死後はずっと森の中だったし』

「へぇ」

ユーリットはあまりそう言う話をヴァルフリートから聞いていなかったらしく、純粋に驚いているのか興味深そうに相槌をうっている。

そんなひとりと一本を尻目に、アリエル姫はその場にへたりこみそのまま気絶してしまった。

『お、おい。姫さん！』

「…ひ、姫様！」

「やはり…こうなりましたか…。」

慌ててかけより、アリエル姫の身体を起こすユーリットに、サリアは溜息を漏らすと、懐からハンカチをとりだし、アリエル姫の口元の涎を拭う。

『…やっぱり俺が恐かったのか？』

「違います。確かに姫様は武器だけで怯える方ですが、これは容量が超えただけです。」

「容量？」

「姫様は、未知のものを見ると非常に混乱される方で、恐らく魔剣殿の存在が姫様の許容範囲を大きく凌駕してしまっただけです。」

「つまりヴァルが魔剣ということに、びっくりして気絶した。と？」

「ええ、…見ての通りです。」

そういうサリアにユーリットとヴァルフリートは複雑な気分になった。

馬車でサリアが懸念していたのは、この事だったらしい。

喋る剣と言う存在事態がアリエル姫にとってキャパオーバーだったのだろう。

怯えられるより、これはこれでキツイ。

「起きたら、多分落ち着いてるので大丈夫ですよ。…気絶してくれたのは、むしろ好都合です。さっさと部屋に運びましょう 」

『好都合って、お前…本当に姫つきの女官か？』

サリアはフッと唇を吊り上げヴァルフリートに視線を向ける。

「女官ですが、何か？」

女官サリア・マートック。魔剣をも黙らせる彼女にユーリットは背筋に寒いものを感じた。

彼女を敵にしてはならない。そう本能が警鐘をならしていた。

ユーリットはアリエル姫を抱き上げ、姫の部屋に連れて行くと侍女達が待っていましたと言わんばかりに、ユーリットからアリエル姫を奪うと、手際よく服を脱がしていく。

ついでにユーリットも何故か捕まり、服の採寸をされてしまった。

去り際に「騎士服楽しみにしててください。」とにこやかに言われたあたり、ハミエラ妃の寄越したお針子達だったらしい。

お風呂場へと消えたアリエル姫を見送ると、ユーリットはサリアとアリエル姫が戻ってくるまで、今後の話し合いをすることになった。

「ユーリット殿、貴女はまず、姫様と共に軽いエリストナ王国の結婚形式について学んでいただき、エリストナ王国の風習と礼儀作法を二週間以内に復習して、エリストナ王国とママレカ公国の国境の街ベルーシで結婚式をあげて頂きます。」

「国境…ですか？」

「はい。嫁ぎ先であるギャレット侯爵家の領地でもあります。ギャレット侯爵家はベルーシの他にも７つの村と８つの町を保有しています。

たまたまベルーシはママレカ側とエリストナ側の境に位置しているため、式場もベルーシが良いだろうと言うことになりました。」

「…大貴族なのですね。」

「ええ、アルファン子候は王太子殿下とは乳兄弟。ギャレット候は国王の側近。しかも、領地は全て国境線沿いにあります。それが意味することが解りますか？」

試すようなサリアの謎かけにユーリットは、眉間に皺を寄せる。

「…軍の家系ですか？」

「その通り。防衛線の要所を護る軍の最高顧問。それがギャレット一族です。つまり、貴女の結婚はただ後宮にはいるためだけではないと言うことを肝に命じて下さい。」

その言葉にユーリットはやや顔をうつ向かせた。

ギャレット一族との結婚。それはユーリットが後宮に入る事の他にも意味を持つ。

ベルーシは有名な城壁に囲まれた要塞都市だ。そこには常にママレカ公国が他国に侵略された場合に動く軍がある。

ママレカ公国の防衛を左右するギャレット一族に、ママレカ公国の貴族が嫁ぐという事は軍事同盟の強化を内外にアピールする事にな

る。
農民のハミエラ妃と再婚を6年の月日をかけて、巧妙な手口で周囲を納得させたロドニー?世の事だ、ユーリットの結婚を布石のひとつとして考えていてもおかしくはない。

「…しかし、サリアさん。1ヶ月で結婚の準備と言うのはいささか無理があるのでは?」

「ええ、貴女がそう感じるのは当たり前です。ですが、貴女の結婚の準備はとっくに完了しているんです。」

「え゛」

『…ああ、どうりで手際が鮮やかだと思った。』

呆れたようなヴァルフリートに、ユーリットは顔はしかめた。

「…どういう事?」

『つまりだ、お前の意思なんぞ関係なく結婚を進めていたと言うことだ。
お前、変だと思わなかったのか?五年も帰ってない部屋のクローゼットに、お前にぴったりなサイズの服があるのとか…』

言われてみればそうだ。部屋はこざっぱりしていたし、クローゼットには何故か自分の身体に合った服があった。

ユーリットとて成長しているのに、ぴったりな服をエリーゼ達が設えるなんて無理だ。

『この件は…エナも噛んでるな。』

「……っ」

ユーリットの服の注文は全てギルド経由で職人ギルドに行く。それを発注するギルドマスターのエナがユーリットの情報を流した可能性が高い。

つまり、ユーリットの知らないところで全て決められていたと言う事になる。

信頼していたエナが関わっていた事に、ユーリットはショックを隠せず、思わずドレスの裾を握りしめた。

そんなユーリットの表情にサリアも、苦い表情を浮かべている。恐らくユーリットに対しての罪悪感を彼女なりに感じているらしい。

「…強引な手口だった事はお詫びします。　しかし、それだけ急ぎだったと言うことは理解して下さい。」

「…っ…はい。」

そもそも、ユーリット自身、長期のクエスト中でギルドに居なかっ

たせいもある。

今更、エナや家族、サリアを責めてもしかたがない。

ユーリットは、ギュッと瞼を閉じて、サリアの言葉を必死に飲み込んだ。

これが国家の意思と言うものだろう。

酷いと思う反面、合理的で鮮やかな手際だと感嘆してしまう。

そこには個人の意思はなく、国の意思のみが存在しているようだった。

けれどあの日サリアに誓った言葉はたしかにユーリットの本心からの言葉だった。

アリエル姫を護ること。それは自分が唯一決めた意志である。

その誓いだけは、誰にも否定されても、侮辱されても守り抜かねばならない

こうなったら、この身をかけて姫を護りぬこう。そもそも自分の役目は護衛であって結婚なんて後宮に入るための口実だからと、ユーリットは無理矢理納得した。

そう、夫婦生活の心配より姫を優先にして、あえて夫の事は考えな

いようにしたのだ。

しかし、この時の決意が厄介な事を招くことになるとは、ユーリットは知らずにいた。

五幕（後書き）

サリア無双再び…

読み返すと設定の説明文がクドイ感じがしますよね。

感想でもご指摘を頂いたんですが、どうも語彙が乏しいため表現が難しく自分でもどうするか悩んでます。もしかしたら書き直すかもしれません。

でも話のプロットが脳内で出来上がってて、どうしてもこの先の展開を書きたいという欲もあります。

出来るだけ並行して直していけたらと思っています。

所々クドイ文章があると思いますが、どうかお許しください。

幕間（前書き）

様々な感想を頂き、ありがとうございます。

今回はちょっとした番外編というか、小話です。

幕間

エリストナ王国のギャレット家の屋敷にはユーリットの花嫁道具が着々と届けられていた。

その目録を手に持ちながらアルファンは、隣で優雅に紅茶を飲む男をみて眉間に皺を寄せていた。

「おい、クロード。なんでここに殿下がいるんだ？」

「今朝早くに、飛竜にのっていらして…その、お通ししたらまずかったでしょうか？」

戸惑う家令にアルファンは頭を抱えたい気分になった。

結婚が1ヶ月をきり、アルファンは王宮を離れ、ベルーシのギャレット家の屋敷を訪れていた。

あの後、父親に抗議しにいったら国王から結婚しろと直々に命じられ、渋々結婚の支度のためにベルーシにやってきたのだ。

けれど何故か乳兄弟の王太子が先にベルーシに到着しており、優雅に茶を飲んでいる。それを見てアルファンは気が遠くなるのを感じた。

「殿下、誰の飛竜に乗ってきたんですか？」

「さあ？貝だか臼だか解らないが、そんな感じの竜騎兵だったと思う。」

「…今度はカイウスの飛竜ですか…」

エリストナ王国が誇る竜騎兵隊。最強と吟われる竜騎兵達は相棒である飛竜をこよなく大事にしている。今頃、この王太子が乗ってきた飛竜の乗り手は泣きながら王宮中を探し回っているに違いない。

可哀想に…

「今、忙しくて…殿下の相手をしていられないのですが…。」

「じゃあ、その間。オフィーリアに相手をしてもらおうかな。久しぶりに彼女にも会いたかったし、堅いこと言わないでよ」

「今、オフィーリアを持ってきますから……お願いですからじっとしてて下さいよ。」

アルファンはエルンストに釘をさすと、客間から出て、自分の書斎へと向かった。

『あら、随分とお久しぶりね我が主。』

書斎に入ると壁際からクスクスと鈴のような笑い声が響き渡り、アルファンは脱力した表情でそれを見た。

女性の声が部屋に響きわたるが、その姿はなく、あるのは壁にかかっているのは美しい白いサーベルのみ。
至高の芸術品のように美しく、ほっそりとした女性のような刀身はこれまた見事な鞘に収められている。

「…オフィーリア。」

その名を呼べば、白い剣から再び笑い声が響く

トリギストフ聖魔十剣のひとつ「抑止の聖剣オフィーリア」
トリギストフの作った剣の中で最も美しいと言われた剣がそこにあった。

アルファンはこの剣と契約していたが、このベルーシの館にずっと放置している。

元々アルファンは華美な装飾の剣は好きではなく、扱う剣も片手剣のオフィーリアとは真逆の両手剣であったため、オフィーリアを特に使うこともなく、ここ数年ずっと壁に飾って放置していた。

『一年ぶりかしらね。今度結婚すると聞いたけど本当？』

「どこからそれを？」

面倒な奴に知られたと言わんばかりのアルファンに、オフィーリアはくすりと笑う

『ここ、
鍛練所の近くだから兵士達の声が聞こえてくるの。《アルファン様が嫁を貰うみたいだが、聞いた話だとそうとう厳つい女らしい。そんな猪女を貰われるアルファン様が可哀想》…だって。上司思いな兵士さん達ですこと』

アルファンは苦虫を噛み潰した顔になった。確かに結婚相手の異名は多々ある。女竜殺し、盗賊ホイホイとか…一部の兵士達からは筋肉質で、腹筋割れてて、上腕二等筋が発達したゴリラ女ではないかと、アルファンの嫁の容姿で賭博をしている輩もいる。
アルファンも内心恐々としており、別な意味での夫婦生活に不安を感じていた。

（とりあえず、後であいつら絞めよう。）

ニヤニヤとしていた館の兵士達をボコボコにしようと決意をすると、アルファンは意識をオフィーリアに戻す

「本当だ。アリエル姫の護衛となる女騎士らしい。」

『素敵、話があうといいなぁ』

「…いっそ俺との契約を破棄して、その女騎士と契約をするか？」

半分本気でそう提案するとオフィーリアは『私が貴方ほどの良い男をみすみす手放すと思う？』とあっさり却下されてしまった。

「…今更問うが…なぜ俺を選んだ？」

『私たち十本は共に在りたいという主を本能的に選んでしまうから…何故と問われても困るわ。』

「…剣としてろくに使ってやれないのにか？」

『仕方ないわ。だってそれは私が選んだ結果なんですもの』

「そうか…。」

『ねぇ、お嫁さんを貰う気分はどうなの？』

話題を変えるような明るい声のオフィーリアに、アルファンは再び険しい顔つきになった。

不機嫌な表情からして気分は最悪なのは伺える

「最悪だ。親父に抗議しにいったら問答無用で殴られたし、陛下に至っては懇切と丁寧に、正式な勅命までだしやがった。」

『あらら…。』

「もっと最悪なのが、陛下は内密に俺の結婚の準備をしていたらしく、先程会った教会の司祭の前で恥をかいたぞ。」

式の日取りの都合はつくか、大慌てでベルーシ大聖堂の司祭に聞きにいったアルファンは、既に父親のローランドが式の予約をとっていたことに驚き赤っ恥をかいたのだ。

オフィーリアは思わずアルファンに同情した。

政略結婚だと言うのにきちんと自分で結婚の準備をしようとするあたり真面目と言うか実直と言うか…貴族でも愛人を囲うものが多い中で、アルファンは確実に浮気なんて出来ないタイプだ。

父親達のした行為は少なからずアルファンの自尊心を傷つけたに違いない。

『かわいいお嫁さんが来ると良いわね。』

「…抱き上げられる背丈だといいがな。」

不安そうにポツリと呟くアルファンにオフィーリアは呆れたように『相変わらず真面目ねぇ』と笑った。

この国の結婚式では式場から家まで、新郎が花嫁を運ぶ習慣がある。

アルファンも、当然花嫁を抱き上げて、式場の大聖堂からこの館まで運ばねばならない。それを政略結婚だというのにきちんとやろうと自発的に決めてるあたり、彼らしい

オフィーリアがアルファンを主に選んで良かったと思う理由はここにある。

くそ真面目で堅物だが、女性に対しても誠実な男だ。そのうえ容姿も整っているせいか、よくモテる。

悪い女に捕まらなかったのは奇跡といっても良いだろう。

彼がオフィーリアを使ってくれないのは、確かに剣としては寂しいが、相棒となったことに一点の後悔はなかった。

「と、ついつい愚痴ってしまったな。エルンスト殿下がお前と話したいと、この館に来ている。すまんが俺の代わりに相手をたのむ。」

『御安い御用よ』

そう言うと、アルファンはオフィーリアを壁から取り外すと、久方ぶりに剣帯に差して気まぐれな客が待つ客間へと再び足を向けた。

＊＊＊

星銀の甲冑、白い騎士服、白い髪を結い上げた麗しの女騎士。

それがママレカ公国の城でたちまち話題になるのは時間の問題だった。

貴婦人達はみな好奇の目でユーリットを眺め、騎士達は未だに顔をしかめていた。

騎士達がユーリットに厳しい視線を向けるのはアリエル姫が唯一許した護衛騎士であるということだ。

春の妖精ような姫君の護衛騎士になるのは、騎士としての憧れであり夢である。

実際にアリエル姫の輿入れに随行したいと言う騎士達は後を絶たない。

アリエル姫は確かに容姿だけなら姫君としてふさわしいいため、騎士達の中にはアリエル姫にあらぬ幻想を抱いている輩が大勢いる。

現在、その幻想を抱いている騎士達はポッと出の女騎士を僻んでいた。

「…我々は近寄ることも許されていないのに…羨ましい。」
「…確かにエリストナの後宮に入るため女騎士は必要だと言うのはわかる…でも、納得がいかん。」
「そもそも、あの小娘に姫様を護れる技量があるのか…？」
城の廻廊を、優雅に歩くアリエル姫。その後ろを当然の如く歩く少女が何故か憎らしい。
男の僻みほど見苦しいものはないというが、これは酷い。
そんな視線をユーリットとアリエル姫は綺麗に無視しながら廊下を歩いていた。
「…いやだな…」
「何が嫌なんですか？」
ユーリットが聞き返すとアリエル姫は、ハァと息をもらす。
先程までティータイムでご機嫌だったのに、何故か落ち込むアリエル姫にユーリットは心配そうな視線をむける。
「…後宮なんて入りたくないなと…思っただけよ」
「…。」

「絶対他の側妃とドロドロのベタな展開になりそうだし、後宮に入ると自由に身動きできなさそうなんですもの…図書館とかも制限されそうだし…」

確かにエリストナでは側妃が後宮の外に出ることは王太子、王の寝所に呼ばれた時か、許可がおりた時のみだ。

無類の本好きの姫にとってある意味死活問題である。

「…何よりも…エルンスト王太子って変わり者らしくて、嫌な噂ばかり聞くわ。　噂が本当か嘘か会ってみなくちゃわからないけれど、どうにも不安で…。

ねえ、ユーリット。貴女はわたくしより早くに嫁ぐけれど、わたくしのように不安を感じていて？」

「…不安…。」

アリエル姫はどうやらマリッジブルーらしい。後宮なんてない国に育った姫が、後宮に入ることに不安を感じるのは無理もない。

そんなアリエル姫は先に嫁ぐユーリットも不安なのか尋ねたのだが、ユーリットはそれを尋ねられたことに動揺した。

はっきり言ってユーリットは不安を感じる暇がなかったのだ。

別に自分に自信があるわけでも、相手のアルファンの人柄を知っているわけでもない。

ユーリットにとって婚姻はあくまでも後宮に入るための通過儀礼でしかなく、アリエル姫が後宮に入れば、ユーリットも当然後宮で護衛として暮らす事になるから、夫とは暮らせない。
そんな肩書きだけの結婚をするのは、正直相手には申しわけないとは思うが、ユーリットは結婚生活に関してはこの先どうなるかわからなかった。

むしろ、アリエル姫の護衛のほうに気を配っていたので、アリエル姫に尋ねられてユーリットはどうこたえたら良いかわからず言葉を詰まらせた。

「ユーリット？」

「すいません姫様…私には良くわからないのです…。」

「…わからない？」

「はい。…確かにお相手のアルファン様はご立派な方で、私が結婚するには勿体無い方だとは思いますが…不安なのかどうかと聞かれると…」

正直にそう答えると、アリエル姫はきょとんとすると、眉尻を下げて苦笑した。

「貴女は、恋をしたことがないのね？」

そう言われて初めてユーリットは、自分が恋をしたことがないのに気がついた

異性とは確かに近い環境にあった。ギルドにはユーリットと同い年のメンバーもたくさん居たが、まったく恋愛には発展できなかったのだ。

その理由として、ユーリットにはそんな余裕がなかったこともあるが、彼らがユーリットより弱かったせいもある。

ユーリットに好意をもっていても、自分より腕っぷしが強い女に告白するのは男としては複雑だったらしく、ユーリットもユーリットで、そんな彼らに仲間意識や友情は感じていても異性を感じたことはなかった。

普通、恋愛に対する認識は、絵本や両親の影響で早くて5歳ぐらいから芽生えるものだが、祖父との修行でそれどころではなかったユーリットに、恋愛がどういうものか理解できるはずがなかった。

そう、ユーリットは恋と言う感情に焦がれた事がない、恋愛偏差値0の少女だった。

そのせいか、結婚に対する夢もなく、漠然と「子供を産んで、家名を存続させること」ぐらいの認識しかなかったのだ。

「…恋、ですか…。」

「…え…と、そんなに悩まなくていいのよ？ほら、これから恋することはあるかもしれなくてよ？」

思わずフォローをいれるアリエル姫だが、恋愛より先に結婚して女子しかいない後宮に入るユーリットにそんな機会があるか、わからないのにそのフォローはどうかと思う。

結婚に対して真面目すぎる花婿と結婚に対して夢がない花嫁

ある意味両王家の結婚よりこちらの結婚の方が問題があるように思えてくる。

アリエル姫とエルンスト王太子をくっつけて初孫をゲットしようと画策する、バルジ王とロドニー王だが、これはこれで前途多難な結婚になりそうだ。

『ユーリ…姫さんに気をつかわせてどうすんだよ。』

「っ…申しわけありません！」

「いいの。むしろ少し冷静になれたわ。ユーリットもユーリットで大変なのがよくわかったから。わたくしも…嫌だと言っている場合ではないのに、弱音を吐いてごめんなさいね。」

朗らかに微笑むアリエル姫にユーリットもつられて微笑むと二人は再び歩きだした。

六幕（前書き）

更新遅れてすいません…。

お気に入り登録ならびに閲覧ありがとうございます。

六幕

公太子ウーセルは淡々と盤上を見ながら銀縁眼鏡の位置を指で直し、長考する父王を呆れたように青色の目を細めた。

「…いつまで長考しているんですか。父上」

「っ…ぐぅ…」

ロドニー?世は金色の髪をかきむしり、向かいに座る同じく金色の髪の息子を睨み付けた。

「お前、強すぎるぞ！手加減しろ！」

「…既にしてます」

いかにも熱血漢で熊な父といかにもクールビューティ系で明らかに母似の息子。全くもって似ていない親子だ。似ているのは髪色と瞳の色だけだろう。

執務を終えたウーセル公子は父親と久しぶりのチェスに興じていた。

「なぁ、ウーセル。お前にクリエストロから結婚の申し込みがあったがどうする？」

「どうするもなくも、受けるおつもりでしょう？まあ、私も２４ですから、身を固めておいた方がよいですし。あ…王手。」

「ムッ…ちょっとまて。」

「待ちません。そう言えば、毛の色が変わった娘がアリエルの護衛になったらしいではないですか。」

その言葉にロドニー王は顔をチェス盤からあげて、淡々とした息子に呆れた表情を向けた。

「お前なぁ、いい加減、妹離れしろよ。アリエルが心配なのはわかるが、もうあの子は嫁に行くんだぞ？」

「…別に私はただ王家のことを考えているのであって、アリエルに依存しているわけではありません…。」

プイっと顔を横に反らすウーセル公子に、ロドニー王はニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべた。

「とか言いつつ、アリエルが図書館に引きこもると、食事やらお菓子やら持ってくのは何故だろうなぁ。」

「…仮にも王女が、餓死されては王家の醜聞になると思っての行動であって、他意はありません。」

「では…アリエルが好きそうな本を毎年匿名で誕生日に贈るのはど

このどいつだ？」

「さあ、まったくもって見当がつきませんが、何処の誰でしょうね？」

あくまでも白をきるウーセル公子に、ロドニー王はそれ以上追求するのをやめて、目を細める。

「で？家族以外の人間に興味がないお前が、護衛の娘が何だと言うんだ？　」

その言葉にウーセル公子は視線を父親に戻すと、眼鏡の位置を直し、スッと見据える。

「…本当にアリエルを守るのに足る娘なのですか？」

「なんだ、実力が知りたいだけか。身元調査なんぞお前の事だからとっくにやっているだろう？調べてもわかるとおりの実力者だ。」

「…１１歳でギルドに入会し、１５歳で魔法騎士に昇格。竜退治１５回、盗賊、捕縛１８回。ギルド屈指の上位ランカー。…そんな無茶苦茶な経歴を、１７歳の小娘が持っているとは到底信じられません。」

「…そりゃあ、まあ…」

「しかも、嫁ぎ先も貧乏貴族であるファベル家にはいささか不釣り合いなギャレット家。ファベル家より上位の貴族達からの非難も多いと聞きましたが？」

そう、ユーリットの結婚には思わぬ弊害が生じていた。

国の思惑より、自分の家の面の皮を重んじる貴族達からしたら、今回のユーリット達の縁談は衝撃的なものだった。

【軍事同盟強化のためとはいえ、なぜファベル家の娘が選ばれたのだ？うちの娘ではいけないのか？】

という声が出てきたのだ。

貧乏貴族であるファベル家に突然舞い込んだ縁談は破格なものだった。

相手のアルファン・ヴィ・ギャレットは現王太子の乳兄弟で近衛師団師団長で、２５の若さで階級は少将。

容姿もよく人柄も真面目、家柄は侯爵位をもつ大貴族。

はっきり言って貧乏伯爵の娘には勿体無さすぎる優良物件だ。

そんな人物と結婚することを知った貴族達の中には、ユーリットに対抗しようと、剣も握った事がない娘に無理矢理剣を持たせて、アリエル姫の護衛騎士にと推薦してくる輩も出てきた。

「あのなぁ、ユーリット嬢の結婚相手をギャレット家の小僧に決めたのは5ヶ月も前なのに、今更文句を言われてもねぇ」

「私に言っても仕方ないでしょう…五月蝿い貴族共におっしゃって下さい。」

そもそもこの縁談が成立したのはアリエル姫に護衛騎士になれる人間がこの国では、ユーリットしか該当者がいなかったせいだ。

嫁ぐ理由がアリエル姫の護衛騎士になると言うのなら、本当に強いのか見せてみろとウーセル公子のように難癖までつけてくるに決まっている。

「…あー…面倒くせ。わかったわかった。3日後の騎士団の公開訓練に彼女をださせるから、実力とやらを存分と見るがいい。」

天の邪鬼な息子の相手が面倒臭くなったロドニー王は、丸投げするようにそう言うと、チェス盤に目をむける。

父親からあっさりお許しがでて、逆にウーセル公子は困惑した表情を父親に向けた。

「本当によろしいのですか？」

「よろしいに決まってんだろうが。うちの騎士団の馬鹿どももうるせぇし、ちょうど、お披露目しようと思っていたとこだ」
「どうして…それほどまでにユーリット・ファベルを信用なさるのですか…？」

そのウーセル公子の言葉に、ロドニー王はニヤリッと口元を吊り上げる。

「信用？ちがうな。これは確信だ。なんせあのエドワード・ファベルが将軍職を辞してまで育てたいといった娘だぞ？強いに決まっている」

はっきりと言い切った父親に、ウーセル公子は不愉快そうに眉を吊り上げだ。

「ならば、篤とその実力とやらを見るとしましょう。」

「おう、そうしとけ」

ウーセル公子はソファから立ち上がると、ロドニー王に一礼すると、部屋を後にした。

出ていった息子の後ろ姿を見ながら、ロドニー王は苦笑した。

「…アリエルを側妃として嫁がせることがまだ気に食わないのか。…まったく、困った公太子様だなぁ」

１５歳の妹の結婚に反対したのはウーセル公子と幼い兄弟だけだ。
一見、冷たい印象のウーセル公子だが、ああみえて家族想いな性格をしている。
抑えようとああ冷たい態度や言動をするが、端々にだだ漏れだ。

今回、ユーリットの話題を持ち出してきたのも、妹の婚姻を勝手に決めた父親への八つ当たりだ。

公王になるには未だに未熟だが、変に父親のいいなりになる優等生じゃないだけましだ。

（…さて、見ものだなエドワード。お前が孫に何を教えてきたか…じっくりと見させてもらうか。）

ロドニー王は、わくわくした子供のような笑顔を浮かべると、王手をかけられた駒を指で弾き倒した。

＊＊＊

「騎士団の公開訓練ですって？」

アリエル姫はその話を兄から聴いて、顔を真っ青にさせた。

「…父上が是非とも参加しろと仰せだ。問題のファベル伯爵令嬢は

？」

「ユーリット殿は、ハミエラ妃に呼ばれて席を外しております。それより、３日後とは随分と急な申し入れですが」

「仕方なかろう？時間がないのだから」

「兄様！ユーリットは結婚前の花嫁ですのよ！　怪我をしたらどうするんですか！」

「…医師と僧侶も手配済みだ。なんだアリエル、やけにファベル嬢のが気に入ったのか？」

その兄の言葉にアリエル姫はうつむくとスカートの裾を握る。

「…ユーリットは、性格も優しいし、話してて凄い気が和らぎます。聞き手上手で…」

ポツリポツリと溢すユーリットの想いにウーセル公子は目を細める。

「《※麗しの蜜夜（※恋愛小説全５８巻）》の話を内容を話しても引かなかったし、《※青の聖戦（英雄騎士伝説系・全１７５巻）》を愛読する同志よ！！し・か・も！《※華燭の宴（恋愛小説全２５巻）》のアバインと友のコルトスとの死別の話をすると一緒に感動して泣いてくれたのよ！！あんなにわたくしの趣味に付き合ってくれる人…今までいなかった！！」

「……。」

「……。」

目をキラキラさせて恋する乙女のようにユーリットを語るアリエル姫に、サリアは頬をピクピクと痙攣させ、ウーセル公子は眉間に皺を寄せた。

「だから、あんな野蛮な訓練に参加させるのは断固反対いたします わ！嫁入りまえのユーリットを傷つけることは…同志として、主として見過ごせません！」

いつの間にか己の知らぬとこで、人見知りが激しい妹がここまで懐くとは…常に冷静を心がけるウーセル公子も流石に内心驚愕したようで、その瞳に嫉妬の炎が宿る。

「…同志だと？何を馬鹿な…私は認めんぞあのようなポッと出の田舎者。お前の面汚しになるに決まっている。

大体なんだあの乏しい容姿は！胸も尻もいない、愛嬌もない、品もない。ないない尽くしのがさつな女が王族の護衛騎士とは笑わせてくれる。」

つい、思ってもいない言葉を言うとアリエル姫は、目を見開きキッと兄を睨み付けた。

「まあ！酷い！ユーリットを貶すなんて…いくら兄様でも聞き捨てなりませんわ！わたくしの大事な騎士を貶す兄様なんて…嫌いよ！」

プンスカと怒り狂うアリエルにウーセル公子は無表情のまま、目線を反らし立ち上がる。

若干、目元が潤んでいるのは気のせいだろうか。

「…父上の伝言は伝えた。時間は朝９時、場所は第三演習場だ。遅れるなよ？」「まって兄様！ユーリットを参加させるとはまだ…！」

淡々と伝えると、足早にアリエル姫の部屋をでていくウーセル公子の背中を見ると、アリエル姫は嘆息した。

「…何もあんなに早足で出ていかれなくとも」

「ブフッ！」

「サリア？」

ウーセル公子の様子を一部始終みていたサリアは思わず吹き出してしまったが、咳払いをしてなんとかごまかすと、アリエル姫に向きなおった

「…とアリエル姫、これはユーリット殿のお披露目なんですよ。」

「お披露目…？」

「はい。王宮内では未だにユーリット殿の力量を疑う輩がたくさんいるんです。
中にはユーリット殿を引きずり降ろしたいと考えている者もおります。」

「…ユーリットを…」

「ユーリット殿の実力を見れば、はっきりと婚礼の本来の目的を思い出すことでしょうね。」

そう言うと、サリアは口元を吊り上げる。

平和な気持ちのままで生き抜けるほどエリストナ王国の後宮は甘くはない。

剣術や武術を付け焼き刃で覚えた「平凡」なお嬢様では、アリエル姫の護衛は荷が重いと、この訓練で知ることになるだろう。

「さて、姫様にも少し我慢していただかねばなりませんね。」

「我慢？」

「ユーリットの実力を見て貴族達は黙る事になるでしょう。生半可な腕ではアリエル姫を守れるはずがないと知らしめるのが今回の目的です。…まあ、姫様の護衛騎士になりたいと夢見るムサイ独身騎士共もいい加減諦めるでしょう。」

「え、あ…その！」

「…姫様も見学しているなかでユーリット殿にボコボコにされたなら、精神的効果は二倍になるかしら…」

「さ、サリア？もしかして、わたくしに…あのマッチョの固まりが集まる集会に私も出ろと？」

「はい、エリストナ王国に輿入れするときに騎士団も随行しますし、今のうちに慣らしましょうね。」

にこやかな笑みを向けるサリアに、アリエル姫は顔面蒼白になりながら思わずカタカタと震えはじめた。

そして、何かがぷちんと切れる音が聞こえた

「い、イヤァーーーー！マッチョきらぁあああい！！」

その日、泣き叫ぶ姫の声が城中に響き渡り、姫の下の弟王子達が爆笑していたという。

アリエル姫の叫びを聞いたユーリットは慌ててハミエラ妃の部屋か

ら出ようとしたが、女官たちに阻まれた。

「ユーリット、そんな格好で何処にいくの？」

「妃殿下…」

ユーリットの今の姿は純白のドレス…つまり、ウェディングドレスの姿をしている。

ユーリットがアリエル姫の元から離れて、ハミエラ妃に呼ばれたのはウェディングドレスの仮縫いのためだ。

「うらやましい…コルセットなしでその体系…」

「肌も白くてスベスベ…もっちり肌が素晴らしいですね」

「コンセプトは《雪の妖精》にしましょう！」

「生地はエルニア産の絹にしましょう！やや水色が入った白が良いですわね。装飾は真珠と銀の刺繍糸…お花は百合にしましょうか」

「型はマーメイドより、清純なAライン？」

「馬鹿ね、ユーリット様は小柄で華奢だからエンパイヤラインとベルラインみたいに、裾をふんわりさせるのが良いわ。ネックラインはパフスリープね！これだけは譲れない！」

やる気満々のお針子達だが、飛び交う単語が既によくわからない。
マシンガンのように飛び交うお針子達の声に、ユーリットは若干引き気味な表情で、ハミエラ妃をみれば本人はニコニコとして、お針子達を見ている。

「あの…妃殿下？」
「ユーちゃんのウェディングドレスはね、エリーゼさんの希望なの。うちのお針子達は優秀だからデザインは任せてね」

ウェディングドレスは質素なもので…と言おうとしたら先に牽制されてしまいユーリットは押し黙る。

母の希望なら仕方ないとユーリットは半ば諦めた。

「…あと、このウェディングベールも貴方のお母様から預かってきたのよ。わざわざ手製のベールを貴女に贈るなんて…素敵なお母様ね」

ハミエラ妃の手の中にある美しい白百合と蔦柄の刺繍が施された白いベールをみて、ユーリットは病弱な母を思い出し、キュッと唇を噛む

本当なら母のエリーゼがウェディングドレスを娘のためにあつらえたかったに違いない。
母が娘のウェディングドレスを選ぶことは、この国では別れの儀式であり、母親が最後にしてやれる祝福だ。

エリーゼは体が弱くとてもじゃないが、王都になんて来れない。責めてもの祝福を精一杯、ベールにこめたのだろう。

「……。」

「…結婚式には来れそう？」

「…多分…無理でしょう。」

結婚式に出るのは兄二人と父と親戚の従姉妹と伯父夫婦、あとは仲人である王弟・メルウェル公爵と護衛の騎士団が参列するぐらいだろう。
本来は母にも参列して貰いたいが、王都にも来れない母に、さらに遠いベルーシに「来てくれ」なんて到底言えない。

「…そう」
ハミエラ妃は残念そうに目を伏せると、ユーリットの頭にそっとベールをかけてやる。

ユーリットの白い髪の毛をすっぽりと覆うベールは粉雪のように淡く、ユーリットの顔立ちを柔らかく見せる。

本当に雪の妖精のようだ。

「まぁ、素敵！…さあ、皆さん。このベールに合うウェディングドレスにしてね。」

「「はい、公妃様！！」」

その返事にユーリットは再び苦笑いを浮かべ、突進してくるお針子達をどうかわそうか思案しながら、ドレスの裾に手を伸ばした。

六幕（後書き）

更新が滞り申し訳ありません。

今回登場したウーセル王子の容姿を詳しく説明すると三つ編み眼鏡です

緩い感じの三つ編みに眼鏡です。容姿は母似で、非常に美人です

性格はツンデレで過保護でシスコンです。多分嫁さんは苦労するタイプ

アリエルに嫌いと言われただけで涙ぐむ、ちょいヘタレ具合が弄りキャラになりそうです。

ウェディングドレスのイメージ画を活動報告に載せてみます

（できなかったらすいません。）

閲覧ありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9099y/

転換の魔剣と抑止の聖剣

2011年12月22日12時05分発行